

本 BOOK

# 『原始人の技術にいいえ』

岩城 正夫 著 大月書店(国民文庫845)  
7350

## みごとなモノへの こだわりを

この本は、4つの章からなっている。各章は次のようになっている。

- I. 自分で糸を紡ぐ
- II 石器づくりが生んだ仮説
- III 古代発火法をさぐる
- IV 私の歩んでいる道

各章の、ひとつ、ひとつ、独立して読んで、はっこつ楽しくて思う。どの章においても、言えることは、著者のモノへのみごとなまでのこだわりである。

原始技術の総体については、『原始技術史入門』(新生出版)においてのバ、古代発火法については、『原始時代の火』(同上)にくわしい。今では、全国各地でいろんな実践が出てきているし、よく見かける「発火器」も、この本を参考にしながらのものであろう。

具体的な、技術的事項については、この二書を参考にするといい。

と思うが、この『原始人の技術にいいえ』は、少ちがう角度から、書いてあるのである。あとがきで、著者は言う『...私自身の失敗や弱みを隠さず書きしるすことにしました。それは、事実をおりのまきに書くことによつて、これを読んでくださる若い人たちの参考になればと鬼ったからです』と、そこには、著者自身の試行錯誤の過程が、少ちおどおどしく、しかし大胆に書かれています。それは、まるで推測小説でも読んでいくかのごとく、先を先をと読みずにおれなくするのである。

とりわけ、2章の「石器づくりが生んだ仮説」の「フリントはヨーロッパではゴロゴロある、少ちおめざりたくないもの」という自分の仮説にこだわりつけ、ついに、その仮説を自分の足で立証していくところなど、ほんと、楽しくなってくる。4章「私の歩んでいる道」で、著者自身が理科の教師であったころのことも書いているが、私は、この本は、教師自身の生き方も含め、モノへのこだわり、研究とは... etc.を教えてくれる、理科教師必読の書と考える (梅田)